九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[03_01]九州大学大型計算機センター広報 : 3(1)

https://doi.org/10.15017/1467966

出版情報：九州大学大型計算機センター広報. 3 (1), pp.1-55, 1970-02-24. 九州大学大型計算機センター
バージョン：
権利関係：

文書を必要とする所もあることをお聞きし、センターとしては少々びっくりしました。指導員の方々のご協力に感謝し、また共同利用のセンターが理解され、早く連絡所が利用しやすい体制となることを望んでいます。

利用者としての一提案

桜　井　　晃

センターの発足以来利用してきた者の一人として、特にセンターの運営について感じたことについて書いてみたい。もちろん現在は仮設センターなので様々な不便があるのは当然であり、むしろ今のレベルで運営されていることに対しセンターの方々に感謝しなければならないと思う。問題は、本センターができ上ってからのことであり、そのときに本格的に考えなければならない問題のいくつかがすでに現われているように思われる。

基本的なこととして考えさせられるのは、大学における計算センターは、我々が単なるユーザーとしてブラックボックスから答を引き出すように利用できるものであると考えてはいけないのであって、我々研究者もセンターを動かしていく者の一人であるという意識を、センター、利用者ともにはっきり持たねばならないのではないかということである。

たとえば、ここしばらくの内にもシステムの改訂、デバッギングなどが常に行なわれてきたようであるが、計算機及びそのシステムが速いペースで進歩している現在においては、このような流動的な状態は、計算機を最大限に利用していかねばならない大学の研究者としてはむしろ歓迎し、積極的に協力していかねばならないものであろう。センター側でも、最新のシステムの状態、障害の状態などについて利用者とすばやい連絡を取って、ともに進歩して行くという姿勢が望まれる。

また利用技術の面でも、センターと利用者がより一体化しなければ有効に解決できない問題が多い。たとえば、新らしくプログラムを書きはじめる大部分は、講習会やマニュアル類でどのような書き方が文法で認められているかということを学んだあとで、実に長い間かかって失敗を繰り返し先輩の話を聞きかじって、実際にはどのような書き方が便利で間違いが少ないか、デバッギングはどうやれば良いのかといったことを学んでいる。センターの限られた計算能力を活用するために、また良いプログラムを書ける人間を世に送り出すという教育的見地からも、現在独学やら耳学問やらで行なわれている、上記のいわばポスト・グラジュエット的なプログラミング教育が有効に行なわれることが今後ますます大事になるように思われる。しかしこのようなことは、人員的にもセンターだけで行なうことは不可能であるし、また長年利用者の間に積みあげられてきた経験を整理して生かすのでなければ意味がないわけである。まず手始めには、センターと経験の長い利用者との協力で、よく起きるエラーを防ぐにはどうしたら良いか、計算時間や記憶場所のオプティミゼイションの方法、FACOMの機

能を活用する方法などといったごく実際的なことについてのわかりやすいテキストを作ることなどを考えてみてはどうだろうか。

上に述べたのと同じことはライブラリーの拡充についても言えるであろう。今でも富士通から供与されたものがあるにはあるが、充分なマニュアルもテスト結果もなく、我々もソースプログラムをチェックしたり、必要に応じては改造を加えたりして使用している。逆に言えば、このような利用者側の努力が有効に整理され蓄積されていくならば、現在の不充分なライブラリーも徐々に整備されていくであろうし、また強力なライブラリーを作り上げるためにはこのような協力関係が不可欠であろう。

以上のような利用者対センターの関係を作り上げて行くためには、現在のプログラム相談を窓口にするだけの方法では決定的に不充分であり、本センター開設に伴なって、より広く利用者をとり入れて行くような新らしい運営技術が生まれてくることを望むものである。

（九州大学　工学部　航空科）

苦　　言

深　野　　徹

昨年12月上旬以下のような経験をした。

ある時系列現象のいろいろな統計的性質を求めるのに、入力データとして実験値を用いた場合にはうまく計算していたが、その同じサブルーチンを用いて、模型解析によって計算機で作り出した同様のデータについて計算をやったところ、ところどころにすごく大きな値が入って書式仕様指定ミスとなって返却された。おかしいのでプログラム相談をお願いしたら、センターのほうで検討するということになった。2、3日して連絡をとってみると、「倍長計算でやったらうまくゆくので、何か理論ミスがあるのではないか」という返事をいただいた。そこで、かなり精力的にプログラムを検討しなおしたがあやしいところが見付からず、ハードがおかしいのではないかと考え、ひき続きセンターに検討していただいた。ところが相当たってもその結果の連絡がない。いったんおまかせしたものをとは思いながら、数日後にせまった研究会で発表の資料にしたいと思っていたところから、センターに様子を聞いてみると「あれはハードに欠陥があったがもうすでになおっているはずだ」という返事である。そこでやっと私の手元に戻ってきたわけである。以上のような経過であったが、この中からいくつかの問題を取り上げてみたい。

① 負担金の問題

負担金の計算が現在1分単位で切り上げ方式でなされているが、これをせめて10秒単位にしてほしい。聞くところによると同じFACOM230－60を使用している京都大学は秒単位の計算をやっているとのことですが。（例として私の9月から11月までの負担金は、1分単位で計算すると1,9200